

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオン、9800 円でフォーマル紳士服販売」
- 2) 「エコな調理法、保温調理が人気」
- 3) 「熱中症予防、“熱中カリカリ梅”に熱視線」
- 4) 「女性の活躍はビジネスや社会に新たな刺激を与える」

1) 「イオン、9800 円でフォーマル紳士服販売」

イオンは 29 日、お盆から初秋にかけて需要が高まる紳士向けフォーマルスーツを 30 日から全国のジャスコ約 200 店舗で、通常の半額以下の 9800 円で発売すると発表した。多くの男性用フォーマルスーツは 2 万円以上で売られる中、生地の産地と染料工程を中国で行うことでコストを抑制した。

低価格でありながらフォーマルウェア独特の濃い黒色を出す「濃染加工」を施した。機能面も強化し、ホコリがつきにくい帯電防止加工を行った。シルエットは 3 タイプを用意。最大で 6 センチまでウエストのサイズを調節可能なアジャスターもつけた。会見した山田彦夫衣料商品本部長は「2 万円以上が当たり前の紳士フォーマルは高すぎると感じるお客さまは多い」と指摘。年間販売目標は 5 万着だが、売れ行き次第では今後、増産する方針。

プライベートブランドの激安戦争が続いているが、今の消費者のプチ贅沢という流れに対応した少し高級な商品が出るとより顧客の獲得になりそうだ。

2) 「エコな調理法、保温調理が人気」

暑い台所では煮物や蒸し料理は敬遠されがちだが、この時期に注目されるのが「保温調理」だ。最小限に加熱したら火を止め、鍋ごと新聞紙や布で包んで保温する調理法で、CO2 の削減になるばかりか、台所から離れることもでき、何より料理をおいしく仕上げることができると主婦の間でも話題となっている。

資源・時間・労力すべてにおいて節約になる良いことづくめの調理法と紹介され、家電量販店でも専用器具や調理法が大々的に取り上げられている。スープや煮物類に主に向いていて、例えば肉ジャガでは「中まで味がしみ込まない」「煮くずれ」といったよくある失敗を回避できる。

下ごしらえは通常の調理法と大差はないが、火が通りにくい材料は小さめに切り、材料全体が煮汁に浸るよう、水やだし汁で調節するなど少しのコツが必要。

座布団、厚手のバスタオル、新聞紙など家庭にあるものでできるので、夏の時期は衛生面を考えて保温時間は長くても 1 時間にするなど決めておけば誰でもできるものだ。要領を掴め

ば様々な応用がきくので、クッキングコーナーなどで実践・紹介すれば反響が大きいかもしれない。

3) 「熱中症予防、“熱中カリカリ梅”に熱視線」

猛暑が続く今夏、「熱中カリカリ梅」を製造する前橋市の赤城フーズに注文が殺到している。沖縄の高校総体に出る北海道の学校からの注文もあるほどだ。

カリッとした固い歯ごたえの同社の従来品の梅漬け「カリカリ梅」よりも、塩分を高めにしたのが特徴。熱中症予防に、と昨年4月に商品化した。

暑さが厳しい今年4-6月の売り上げは、去年の約5倍という。同社の工場は、連日フル操業で、「従業員が熱中症にならないように気を付けています」と話す。

今年もすでに全国で200人以上が熱中症で死亡しているというニュースがあった。

予防には水分と共に塩分と一緒に取ることは常に言われているが、このように「ポケット」に入る食品なら手軽に取ることが出来そうだ。

ちなみに、熱中症で命を失うお年寄りの多くが「エアコン」を付けていないという調査結果も出ているが、「節約のため」が一番の理由だとしても、命を落としては元も子もない。

水分・塩分を摂取するだけでなく温度管理にも気をつけたい。

4) 「女性の活躍はビジネスや社会に新たな刺激を与える」

男女雇用機会均等法が施行されて四半世紀近くになるが、管理職に占める女性の割合は、2008年に米国が42.7%、ドイツが37.8%、英国が34.6%、スウェーデンが32.2%これに対して日本は09年に10.2%とようやく2けたになったところと、日本の女性活用は先進国の中で際だって低い。

企業も社会も女性の能力を生かすことでもっと活性化できるはずだ。

賃金支払いや固定資産額などが一定なら、従業員の女性比率を10ポイント上げると売上高が0.8%増えるという研究結果も出ている。

育児休暇や短時間勤務制度など、両立支援の為に法律や制度は整ったが、理解の不十分な管理職や長時間労働が常態化している職場が多く、女性が働き続けられるような環境をもっと増やさなくてはならない。

大切なのは女性を特別扱いするのではなく、男性も仕事と生活の調和が取れる働き方ができるよう配慮することだ。

女性側の意識改革も必要。将来を囑望していた女性が結婚・出産であっさりやめたと残念がる人や、管理職に登用しようとしても本人が嫌がるといった声もあり、女性も若いうちから「職業人」としてのキャリアを真剣に考えるべきではないか。